

異なる文化を理解すること

大野元裕

7月7日、ロンドンの地下鉄とバスがテロリストの標的となった。この事件は、西側先進国において再度テロが発生したということで、少なからず我々にもショックを与えた。この事件が有するより深刻な問題は、イギリスにおける「多民族・多文化社会」の一つの貌を象徴していたという点である。犯人の一部が育ったリーズという町では、2001年の9・11連続テロ発生直後に、南アジア系住民と白人との間で大規模な衝突があり、数百名が負傷していた。肌の色が違う、宗教が違う、という理由で、同じ国民が互いに敵視し合い、少数者を排除する環境ができていたのだ。イギリスでは他にも、9・11テロを契機に、イスラーム系学校が襲撃を受けたり、スカーフを巻いたイスラーム教徒女性が殴られる事件が発生していた。「イスラーム＝テロ」という無知が、テロリストを作り上げる環境を醸成していたのではないだろうか。この無知は、政府にまで及んだ。7月7日のテロ後初めての記者会見の席上、ブレア英首相は、「イスラームの名の下にテロが実行された」と発言した。ブレア首相のその後の発言はより注意深くはなったが、このときの発言あまりにも不用意で、宗教対立を煽りかねない発言であった。

テロは、イスラームを含むいかなる主要な宗教においても許容されるものではない。普通の人々にとって、テロは異なる世界の産物のはずである。ごく一部の特殊な者たちのみがテロリストなのである。しかし、特定の民族や社会グループが組織的に排除されたり、あるいは強い被害者意識を有する人々が何かの価値観で結ばれると、彼らはしばしば、独善的な価値観を育み、テロリストに利用される可能性が高くなる。テロリストは、社会の鏡に他ならない。

翻って、日本はどうであろうか。現時点では、国内に居住する外国人や仏教徒以外を組織的に排除し、暴力の対象とする状況にはない。その意味では、テロリストが組織を作るに適した社会が存在しているわけではない。しかし、兆候はある。多くの人たちから、「イスラーム教って、怖い宗教ですね」、「イスラーム教って、民主主義と相容れませんか」と訊かれることがしばしばある。このように質問する人はほぼ例外なく、イスラーム教に対する知識がほとんどないままに、偏見のみで結論を有している。世界人口の2割弱を占めるといわれるイスラーム教徒がテロリストであれば、世界はすでに火の海のはずである。テロリストや犯罪者は断罪されるべきながら、民族や宗教に不名誉な称号をつける差別は、社会を歪ませるほかない。日本でも、特定の階層や民族を差別した歴史が存在したが、そのねじれを解消するために払わなければならなかった代償と努力を思い出すべきである。

国際化は、「語学学校で英語を学びましょう」というレベルに終わらない。国際化は異文化との接触、否、対立という側面すら有している。それどころか、国際化が不可避の波であるのならば、付き合いざるを得ない異文化への対処次第では、我々の社会を不安定にさせる可能性がある。我々は、異文化といかに接していけばよいのだろうか。

自らの立場を常に正しいと考え、それを相手に押し付けるやり方はしばしば、無用の反発を招く。これが反発にとどまっているうちはまだしも、それがテロリストを養成するのであれば、事態は深刻である。アメリカがよくやるように、自分の立場を絶対的なものと考え、その価値観を押し付けようとする手法は、異文化の価値を認めない独善的なやり方

である。たとえば、テロを育みかねない社会が悪いと考え、外国の社会を変化させ、民主主義をあまねく広めようとするような立場は、その典型である。テロを武力や警察力のみで封じ込めるのは困難であり、社会のゆがみに対処すべきであるとの問題意識は正しい。民主主義を広めることにも問題はない。それにもかかわらずアメリカが困難に直面してしまうのは、独善的な立場と手法を用いるからである。2004年1月、チェイニー米副大統領は、スイスのダボスにおいて中東の民主化を提言したが、そこで民主化が進んでいるとされたのは、ヨルダンやモロッコ、サウジアラビアなどのアメリカと関係のよい国であった。逆に改善が必要とされたのは、イランやシリアなどの反米色の強い国家であった。イランがサウジアラビアよりも民主化が進んでいないと考える人は多くないだろう。要するに、アメリカとの関係の度合いが、民主化判断の基準であると思われるような正当化が反発を招くのである。アメリカがテロの対象となるのには多くの理由があるだろうが、その一つが、このような独善的な立場にあるのは疑いない。

国際貢献も独善的な押し付けであってはならない。たとえばイラクの復興に際して、文部科学省は一時期、世界的なイラクの遺跡保護・修復を検討していた。これに対し、コメントを求められたわたしは、「イラクの人々が生活に困って食べられない中で、日本が遺跡を人権よりも優先していると思われるのであれば、それはマイナスである。適切な時期と環境を待つべき」と答えた経緯がある。「やってあげる側」も無責任では済まされない。

やはり、異文化や異なる環境に属する人々と接触する際には、たとえそれが善意のボランティアであったとしても、気をつけるべきことは多々あるだろう。異文化に接するためには、まずは相手を理解することが重要ではないだろうか。理解の仕方にもやり方がある。現代ではさまざまな書籍がありふれており、勉強をしようと思えば、異文化を知ることができる。他方で、重要なのは、どのような態度で相手を理解するかである。たとえば、イスラームは豚肉を食べることを禁じている。イスラーム関係の文献を読むと、「暑いアラビアでは、豚肉は腐りやすく、病気を媒介することも多かった。このため、イスラームは豚肉を食べるのを禁じたのである」と書いてあるものがある。そのとおりかもしれないが、イスラーム教徒にとって重要なのは、このような説明ではない。なぜ豚肉を食べてはいけないか。その理由はただ一つで、「神様が禁じている」からである。相手の信仰を尊重するとはそういうことである。

アラブの人々と接触する上でも、当然相手の慣習や礼儀はある。たとえば、相手に足の裏を向けるのは大変な失礼に当たる。これらの慣習を覚え、礼儀正しく振舞うことは正しい。しかし、異文化の人々と接触する上でより重要なことがあるのではないだろうか。外国人が我々の家に来たときを考えてみよう。土足で家に上がることはやはり許せないだろう。しかし、許せない規則というのはそんなに多くはないであろう。果たして外国人が迷い箸をすることは許せないだろうか。正座するとき座布団を踏んだら、礼儀知らずと思うだろうか。それよりも重要なのは、相手を一人の人間と認め、尊敬と共に真摯に付き合う態度ではないだろうか。このように考えると、異文化や外国人と接することは、難しいことではない。それは我々が避けることのできない「他人」との接触に似ているかもしれない。相手の価値観を尊重し、独善的にならず、いわれのない理由で差別しない、そんな当たり前のことがテロが根を張りにくい社会を作るのではないだろうか。